

絵 と 私

文 田 哲 雄

若いころに描きはじめてから、いつの間にか半世紀に近い年月が、過ぎ去ってしまいました。描いたものは、静物画からはじまって風景、そして少女とテーマの範囲をひろげていきました。そのなかでも人物画に興味をもつようになり、とくに少女を描くことが多くなりました。麦わら帽子をかぶった少女の横顔などからはじまって、バレエの踊り子などをテーマにしていきました。このあいだに描いた作品はかなりの数になりましたが、それぞれの絵に思い出があります。

このことについて、これまでの制作の日々のなかで記憶していることを、少しお話をしたいと思います。

1 病気の療養中に絵の世界に入ったこと

絵を描きはじめてのは、肺結核にかかり、その療養中のことでした。高校の1年のとき発病しました。医師の診断の結果は私の予想（希望）とは違い、病状はすすんでいて悪いものでした。当時この病名を告げられることは、いまで言えば、癌になったことと同じ意味あいをもっていました。そのとき頭にうかんだのは、休学、留年、そしてそれと少しはなれたところに死というもの、漠然と考えられました。これから、6年にわたる長い療養生活が始まるのですが、このあいだ小康状態と数回の再発をくりかえしていました。病状が幾分おちついた時期に医師の許しをえて油絵を描きはじめてのです。もちろん熱っぽい身体をかかえて寝たり起きたりの生活ではありましたが――。

そんなある日、美術部の先輩Mさん（ずっと昔に急逝して今はもう語ることもできませんが――）が訪ねてきました。ひとしきり絵画論を語ったあと、少し疲れて横になっている私の枕もとに数冊の美術雑誌をおいて帰っていきました。彼がひたすら思い続けていたのは、ヨーロッパの文明社会から遠くはなれた南太平洋のタヒチで多くの名作をのこした画家ゴーギャンのことでした。高校生らしい夢と情熱にあふれた一途な言葉に私の身体も熱くなったような気がしたのを覚えています。

Mさんが置いていってくれた美術雑誌は、戦後まもない頃のことですので、今から考えてみれば紙の質も印刷も粗末なものでしたが内容はすぐれていて資料として貴重なものでした。Mさんは油絵を盛んに描いていましたし書物もよく読んでいたようで話しも美術のことだけではなく思想、哲学にまで及んでいました。たとえば実存主義哲学のことを耳にしたのもMさんか

3 帰郷して高校の教師になったこと

挫折感をいだきながら静かな田舎で、生徒を相手の教師生活に心の落ち着きをとりもどしはじめます。当時は東京時代のころめ、ササギやナタの樹が、あちこちにはびこり、

制作は、画集を模写（綿密なものではなく自由模写で全体の色彩や雰囲気を描写する程度のものですが）することからはじめました。この仕事は当時はあまり自覚しないで試みていましたが、絵画の習得方法としては当をえたものだったと後に気がつくことになります。明治時代以来、日本の画家たちがヨーロッパに留学した際、かの地のすぐれた作品を模写していたということを知った時です。私としては、断続的な療養生活の時間を送っていたなかで、グループで描いたり指導をうけたりすることは困難なことでした。それでいつのまにか自然に、この方法を考えたのです。この方法は現在も、人にすすめたり指導したりしています。

2 上京してからのこと

東京芸術大学を受験しますが合格しませんでした。受験前の1年間は、病後の保養時期で受験準備も不十分でしたのであまりこだわりませんでした。すぐ予定どおり多摩美術大学を受験、幸い入学することができました。

入学した当初の美大生の生活は健康に不安があったものの、自由で好奇心に満ちたものでした。今とちがって都会指向がつよく、東京での都会生活は当時あこがれの的でした。伝えきく19世紀末のヨーロッパの頹廢的な雰囲気—世界各地からパリに集まった画家たちのグループ、エコール・ド・パリ（パリ派）のこと、モディリアーニ、ロートレックやその周辺の画家たちの生活を気取って、友人たちと夜の街を徘徊していました。そこにはいつも酒とタバコの匂いがたちこめていました。

大学での授業は、午前中が裸婦のデッサンの実技、これは2年になってからは油彩になりました。午後は講義科目の時間にあてられていました。実技の指導は週一回、教授がくる程度の自由なものでしたが、教室のなかには自らの努力が必要だといった雰囲気がありました。

2年生のとき描いた「静物」が、第12回南日本美術展で最高賞の県知事賞を受賞しました。朱色の背景を大きくとって画面の下の方にバイオリンを配した図柄の絵です。とてもうれしいことでしたが、その後にきたものは自信ではなく一種の迷いのようなものでした。その原因は、そのころ時代の趨勢が抽象画の方向にむかっていて、自分の表現方法に思い惑うことが多くなっていたことです。

やがて卒業の時期になりました。昭和34年といえば、決して景気のよい時代ではありませんでした。世の中に「画家を求む」といった風変わりな会社はありませんから、就職はほとんど無いのにひとしいわけで、私の友人の多くはそのころ創設されたばかりの東映の動画（アニメーション）部に入りました。私も結局のところ、読売新聞の下請け会社で、みずほ広告社という小さな広告代理店に就職しました。

しかし、デザインの仕事をしながら絵を描くことは時間的に無理なことを感じつつ日々を過ごすようになります。このころ、高校時代の先生から鹿児島の高校の先生になることをすすめられて帰郷することを決意しました。

3 帰郷して高校の教師になったこと

挫折感をいだきながら静かな田舎で、生徒を相手の教師生活に心の落ち着きをとりもどしはじめます。当時は東京時代のことや、さまざまな情報からできるだけ離れようとしていました。自己の領域をたとえせまくても保ちたいといった心理がつよく働いていましたから、このような環境は私にとって、うってつけのものでした。やや隠とんに近い日常でしたが、ただ、創作活動は絶えることなく続けていました。帰郷を機会に二科展に出品をはじめましたし、南日本美術展へも毎回かわることなく作品を発表していました。

「真昼」が第49回二科展で特選を受賞、受賞式に出席のため、久しぶりに鹿児島をでて上京しました。2年後の「二つの芽」が第51回二科展で会友に推挙されて、ようやく自分の表現方法に自信をとりもどすようになりました。これらの作品は、女性の裸体像に庭さきにあった花や野山に自生している植物を組み合わせた構成になっています。生活している環境がいつのまにか絵に表現される結果になりました。

4 県立短期大学に赴任したこと

自由な雰囲気の中で制作を始めることになります。あたらしい環境にはいって、一つの転換期にいる自分を感じていました。この年の秋、思いがけず第77回二科展に出品した「花（少女）」が、巴里賞（フランス政府給費留学生として1年間の留学）を受賞しました。この受賞に関連して第二代学長佐伯延次郎学長が県当局と交渉され県育英財団留学制度の留学生としても認められることになりました。

5 夢が絵の制作のきっかけになったこと

フランス留学の夢がかない渡欧してパリでの生活がはじまりました。生活に慣れないうちにフランス語学校に通うことになりますが、授業が難しくて情緒不安になりました。このような日々が続いたあと少し落ち着いたある日のことでした。沖あいに停泊している白い一隻の船と、その前をよこぎる少女が夢のなかに出現したのです。当時のスケッチブックには「午後3時ごろの光の中に、その船は浮かんでいた。少女は遠くで私に向かって、なにか語りかけているが—私には聞こえない—」といった意味のことがかなり克明に記録されています。その朝、目がさめるとさっそく夢の記憶が残っているうちにと、簡単なデッサンと文章にしるしたのです。このことは、昨日のように記憶によみがえってきます。

このように絵を描く場合、夢が創作の直接の動機になることがあります。しかしこんなことはごくまれなことで、その構想にかかる時間は数年、1年、半年とさまざまです。

このことについてを考えると、フロイトの精神分析学—深層心理と芸術作品創作との関係のことが思い出されます。

5 テーマとモデルのこと

人物とくに少女の姿を高校時代から描き続けてきました。しばらくは少女だけを画面にとり入れていました。少女には生き生きとした生命力を感じるとともに、そこには不安定な要素—渋谷龍彦氏によれば「もっとも性的なものともっとも純潔なものとの秘密の共存」をもっている存在だと思います。少女を表現するのは大切なテーマでした。

そのうち少女の背景に、いろんなものを登場させるようになりました。花、とくに蘭のなど—バイオリンは、初期のころ静物画で使って以来、主役ではありませんが画面の中に描きこんでいます。白い船は、渡欧中に夢のなかの光景に出現して以来描きはじめてから主要なテーマになってきています。その後に天使を描くようになります。天使は、性を越えた存在らしいのですが、宗教絵画に描かれ天空を飛翔する姿は、ギリシア彫刻のサモトラケの女神像とともに魅力的で、いつかはとりあげようと思っていました。

飛行機は近年とりあげた興味深い対象です。船は旅行するのに昔から使われてきましたが、飛行機を使うこともかつてのように珍しいことではなくなって、日常化しています。

ある日、空港の待合で離発着する飛行機を見ていて、その無駄のない曲線をもった機能的な形にこころ惹かれるようになりました。その曲線は人間の身体、とくに女性の裸像に質こそ違いますがそこには類似性が感じられ、これはバイオリンにもいえます。また、船や海も広い意味で女性の属性をもっていると思われます。これらのものが南国的な光りのなかつつまれている状況、そこに感じられる生き生きとしたエロティシズム（生命力や官能性）は魅力に満ちています。

このようなモデルを日常の風景の中から心象風景に取り込むことは、イメージを豊かに膨らますのに必要なことです。

6 このごろ創作について考えていること

アール・ヌーヴォーは、前世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパを中心にほとんど世界的な規模で広がった「新芸術」様式で近代のあらたな第二のルネサンスといわれています。この様式は19世紀から20世紀への転換期に、20世紀の芸術において大きな意味を持つようになる、さまざまな問題を提示しました。

この様式の特色は高橋秀爾氏によれば「線といっても、古典主義的な均衡のとれた水平線や垂直線ではなく、奔放自在に曲がり、掬じれ、うねり、波打つ流動的—」「ゆるやかに流れる曲線と成功なたちの芸術、詩的な、時には象徴的な主題によるうつろいやすい美と豊麗な装飾の芸術、女性的、退廃的芸術」なのです。それは、芸術の表現の対象が人の内なる世界に向かい、昼から夜への旅立ち、魂の深淵を覗く未知の世界への憧れでもありました。—これらは私も好きなイメージです。

19世紀から20世紀への変わり目という混沌とした時代の芸術表現は、20世紀から21世紀に生きている今、アール・ヌーヴォー様式は、現代とオーバーラップして私もその転換期にいること

を肌で感じさせます。

私の人生に対する考え方の中には、人生を生きるのは待つこと、求め惑うことなく、何かをじっと待っていることだという心の動きがあります。これは私が創作するときの心構えと同じものだと思っています。

人は朝、めざめの前に美しい夢を見erるといいます。今年作品は「朝」というテーマで制作するつもりで、この作品にはここ半世紀にたいする深い想いとメッセージを描きこみたい—強く、ときとしてはうつろいやすいイメージを画面にしっかりと、静かに定着させたいと願っています。

いま、私はとても感じやすくなっています。